入選童話

一等　さいこうばらひ

K・S

國男さんの町に、さいこうばらひ　こ云ふお祭があります。お正月のお休みが過ぎて間もない、一月十四日の晩に。

本當の名は左義長（さぎちやうさい）祭こ云ふのですけれど、みんな、さいこうばらひ、さいこうばらひ、こ云つて、おだんごをさした木を燒きに行くのを、樂しみにして居ます。

國男さんは、その晩、はじめてお母樣こ、そのお祭りを見に行くことになりました。

國男さんは、幼稚園で、お團子さしをしました。小使さんが、お山から取つて來てくれた木の枝を、みんな一本づゝ頂いて、それにお團子をさすのです。木の枝は、ごれも國男さんのせい程長く、葉つばのすつかりなくなつた枝が、何本もつんつん出てゐます。お團子、それはお米の粉でこしらへた、ふかしてたのまだ溫いので、白いのを八つ、赤いのを六つ頂いてさすので

した。

「美味しさうだな」やはらかなお團子は、國男さんが指先でおさへると、すつと引つこんで、そのまわりを、ちよつ、ちよつ、とつまみますと、丁度鐵かぶとの樣な形になりました。

「僕の　ほら　鐵かぶとだよ」そう云つてお友達に見せますと、「いゝね、僕も拵へ樣」「あ僕もだ」と皆が眞似をして、すぐに太郎さんの枝にも、正男さんの枝にも、鐵かぶとのお團子がつきました。

それに、黃色い色紙で折つた鶴と、水色の紙風船とを下げた枝はとてもきれいです。

國男さんも、お友達も、皆その枝を肩にして、鐵砲かついだ兵隊さんの樣に元氣でお家へ歸りました。

お夕飯がすむと、國男さんは、もう待ち遠しくてたまりません。

「お母さん、まだ？早く行きませうよ」と、おさいそくです。

まもなく、あたゝかさうな襟卷を掛け、手袋をはめながら、お母樣が、出ていらつしやいました。

外には冷たい風が吹いて、隨分寒い晩です。

國男さんは、お團子の木をかついで、お母樣の前を、スキップしたり、走つたり、時々くる

つとお母様の方を向いて待つてゐたりしながら、海岸の砂濱へ參りました。

もう、たくさん、人が集つてゐます。みんなお團子の木をもつて。

波打ちぎはの近くには、門松が、高く高く、山の樣に積んでありました。その門松の山は、ずつと離れた處に又ひとつ、又ひとつ。

眞くらな空とまつくろな海は、こわい樣です。

と、急に、あちらの方に、まつかな火が燃え上るのが見え出しました。

「山王町のがもえたぞー」誰かが大きな聲でどなりました。と又ひとつ、今度は、反對の方に、眞赤な火がもえ始めました。

その時、國男さんの側を、二人の男の人が何かロ早に、はなしながら驅つて行きました。

「さア、そろそろつけべえよ。」

「あゝ」

シュツ、マッチをする音がしたと思ふと、下側の松の枝に、火がついたらしく、パチパチ、パチ、パッとあたりが明るくなつて、メラメラと、赤い火が燃え出しました。どんどん燃えます。白い紙が、ハタ〳〵と鳥の樣に、飛び上りました。お隣りのよつちやんの書初めでせうか。

國男さんのお家の門松も、お隣りのも、おむかひのも、眞赤に燃えてゐる樣子です。

何時の間にやら、大勢の人が、火のまわりを圍んで、お團子をさした長い枝を、燃えさかる火のそばに、かざしてゐます。國男さんも、持つてゐるお團子の木を、ずつと手を延ばして、火の方へ近づけました。

パチ〳〵パチ〳〵バーンバーン

赤いおだんごも、白いおだんごも、熱いあつい顏をしだしました。國男さんの拵へた鐵かぶとは、やつぱりあつさうな顏をしません。

「もう食べてもいゝかい」國男さんが、聞きますと、一番枝の先に付いてゐるお團子が云ひました。

「さあ、はやく〳〵。私は、今度ぼつちやんが、惡いお病氣にかゝらない樣にして上げませう」國男さんは、枝を引つ込めて、そのお團子を、フーフーふきながら食べました。そして又、火のそばへつき出しました。

「もういゝかい」今度は、二番目のおだんごです。

「さあ、はやく〳〵、私は今年ぼつちやんが、怪我をしない樣にして上げませう」

國男さんは、フーフーと又ひとつ、あついのを食べました。今度は三つ目のおだんご、「も

ういゝかい」

「さあ〳〵早く〳〵、私は今年ぼつちやんが、悪い蟲に刺されたりしない樣にして上げませう」

「あゝあつい、あつい」　今度は國男さんが、まつかな顏をして云ひました。

ワッショイワッショイワッショイワッショイ　急に、こても賑やかな聲が聞えて來ました。見るこ、大勢の漁師さん達が、まつぱだかでお神樂をかついで、砂濱を、あつちへもみ、こつちへもみ、やがてザブ〳〵こ海の中へ這入つて行くのです。眞赤に燃える火のうしろの、眞黑な海の中へ。

海から上つた漁師さんは、國男さん達の圍んでゐる門松の火に、はだかの身をあたゝめては、ねぢりはちまきをし直して、又海の中へ這入つて行くのです。

「お母さん、あの人達よく寒くありませんねえ」

「あの方達は、毎日、冷たい海の風に吹かれて强い上に、あゝして一生懸命だからですよ」

だん〳〵火のもえる勢が弱くなつて、門松の山が、ごさつこくづれました。國男さんのお家の門松も、おこなりのも、みんな燃えてしまつたらしいです。

これでもうお正月は、すつかり行つてしまつたのです。

「さあ、歸りませう」

國男さんは、鐵かぶとのついた枝を、又かつぎ、片手でお母樣のたもとをつかまへてお家へ歸りました。なんだか少しねむくなりながら。

お耳のそばで、さつきのお團子が、

「國男さん元氣に大きくなあれ。ひとつお年をとつた國男さん丈夫になあれ。」と云つてゐる樣でした。

さいとうばらひ　と云ふお祭りのおはなしは、これでおしまひです。

二等春が來た

杉山よね

〃春が來た〳〵何處に來たァ〃

お庭の方からフミ子さんのお聲が聞えて來ます。ヒロシさんは

〃山に來た　里に來た　野にも來たァ〃

と一緒に歌ひました。